Japanese Association of Russian Scholars

学会報告優秀賞・奨励賞の選考経過と授賞理由

佐藤純一・桑野　隆

2001年度の研究発表会は新潟大学で9月29・30日の両日にわたって開催され，3会場で合計30名の報告があった。そのうち10本が言語関連の発表であったが，これは最多記録であるとともに内容もきわめて多彩であった。9月30日の委員会では，以下の6本の報告を第2次審査の候補に決定した。

五十嵐陽介「ロシア語イントネーションの中和」

岩本和久「オレーシャの作品における「庭」の主題について」

梅津紀雄「ソ連文化を記述する ── 歴史の記憶化とショスタコーヴィチ研究の現在」

大森雅子「『巨匠とマルガリータ』におけるブルガーコフの世界観 ── フロレンスキーの宇宙論を通した作品分析」

佐野洋子「Кто такой черт?」

杉野ゆり「プーシキンの作品における「野獣」の象徴的形象について」

(以上は報告者氏名の50音順)

12月15日の委員会では，各委員の評価の総合に基づいて授賞者の選定について議論し，その結果，五十嵐氏，岩本氏，梅津氏，大森氏の4報告に奨励賞を与えるという結論となった。残念ながら今回も優秀賞に相当する傑出した報告こそなかったが，審査対象の6報告はいずれも興味深いテーマを斬新な観点や巧みな手法で解析を試みる意欲的な力作で，若手研究者の着実な成長が感じられた。惜しくも選外となった佐野氏と杉野氏の報告についても相対的に高い評価を与えた委員が複数あり，4人の受賞者との差はごく僅かなものであった。

五十嵐氏の報告は，従来見逃されていたロシア語のイントネーション型（ИК）の中和の現象に着目し，その統一的な解釈を可能にする音韻論的アプローチを提案する意図に立つものである。発表そのものはいかにも初陣の若武者らしい初々しさに満ち，生硬さと同時に実験材料や理論的基礎の限界を感じさせる面もあったが，新鮮な着想と手堅い論証によって説得力のある報告をまとめた力量を評価したい。今後はこの方向で実験材料の拡大と一層の理論武装に努め全面的なイントネーション型の記述を完成させるよう期待する。

岩本氏の報告は，オレーシャの作品に登場する庭園の主題について，時代を追いながらその諸相を論じ，それが政治の変化の中でどのように変貌してきたかを論じようとしたものである。このアプローチは，作品の手法やイメージの分析が主流をなしてきたこれまでのオレーシャ研究を超えようとする意欲的なものといえよう。ただ，報告内容は，庭園イメージの変化を的確に例示していた半面，政治との関係の説明はやや図式的であった。当時のソ連において庭園が担っていたイメージや機能との関係なども，さらに解明が必要であろう。

梅津氏の報告は，ペレストロイカ以降にロシアの出版物のかなりの割合を占めてきた「記憶の歴史化」問題を，ショスタコーヴィチを例に論じたものである。こうした視点からの報告は当学会報告では稀有であり，ややもすると研究発表というよりも単なる問題提起に終わりかねない。だが氏の報告は，『ショスタコーヴィチの証言』をめぐる真贋論争，回想・証言のせめぎあいを，多方面からの資料を丹念におさえた上で整理したものであり，説得力があった。ただ，『証言』そのものの位置付けに関しては，その方途の有無も含め，一層究めることが望まれる。

大森氏の報告は，『巨匠とマルガリータ』のなかに『幾何学における虚数性』の理念がいかに具現化されているかを，明らかにしようとしたものである。このような文学と他領域との同時代的平行性は，当時の文化状況からしてももっと問題にされてしかるべきであり，氏の報告はそうした試みの一つとして評価されよう。ただ報告内容は，相互関係を的確に裏付けているものの，先行研究における指摘にほぼそっており，ことにフロレンスキーに対する氏自身の新たな読解が見られなかった。また影響関係なのか平行関係なのかを，もう少し明確にする作業も求められよう。

佐野氏の報告は，さまざまな資料をよく調べており，また，それらを通してчертの形象を具体的に明らかにしようとする目的も十分に達成されていた。今後は，そうした成果を，先行する文学研究や民俗学研究のなかにどのように位置付けていくかが課題であろう。

杉野氏の報告は，プーシキンの作品における「野獣」の形象と「自然力」の形象を丹念にとりだしていた。今回の報告は具体例の列挙が中心になっていたが，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

今後は，こうした形象が個々の作品全体の中でもつ意味をも一層明らかにすることが期待される。

ところで 1989 年以来 13 回にわたったこの学会報告優秀賞・奨励賞も，今回を最後として今後は会員の著作物を対象として新しくスタートする学会賞にその座を譲ることとなった。この間の受賞者は優秀賞 7，奨励賞 23 の計 30 名にのぼるが，受賞者各位の今後の活躍に期待するとともに，新しい表彰制度の成功と発展を祈る次第である。

NII-Electronic Library Service